

現代日本語の局面動詞「V- はじめる」

小西 正人

1 現代日本語の局面動詞「はじめる」について

現代日本語には文法的アスペクトを表すとされる「ている」などの補助動詞の他に、動詞に後接し、動詞（句）が表す事象からその時間的局面を取り出す「はじめる」「つづける」などの局面動詞といわれる補助動詞がある。本論文では局面補助動詞「V- はじめる」（以下、局面動詞「はじめる」と表記）について、事例・作例¹⁾を挙げながら、先行研究で記述されているふるまい（たとえばどの種類の動詞につくことができないか、状態変化動詞に後接したときになぜ漸次的変化の意味になるのかなど）の理由について、事象の種類、および事象同士の時間的関係をもとに分析を行う。

本論文では、まず第2節において先行研究とその問題点をとりあげる。次に第3節において局面動詞「はじめる」が用いられる場合を3つに分け、それぞれの場合について詳述する。具体的には、3.2では経路に関連する「はじめる」、3.3ではタクシスに関連する「はじめる」、3.4では特定時点に関連する「はじめる」についてそれぞれ扱う。そして第4節において、それぞれの「はじめる」用法における動詞や共起表現をくわしくとりあげ、先行研究では説明されなかった分布上の偏りや意味解釈について考察する。

2 先行研究

2.1 動詞分類と「はじめる」

ここではまず先行研究として、時定項という「動きの質的变化を表す点」を規定し、動詞句や副詞類などの意味の一括的記述を行った森山（1988）をとりあげる。

森山（1988）は「持続」の局面をもつ動詞句を「動きが運動として展開している期間（[過程]、人が三時間歩く.）」「動きの結果が持続的である場合（[結果持続]、三時間時計が止まる.）」「動きの結果の保存が主体的に行われるという前二者の中間的なもの（[維持]、人が三時間座る.）」の3つに分け、そのなかで「はじめる」については「「し始める」が言えるのは、「歩き始める」「*座り始める」のように、[過程]だけである。[結果持続]はもちろん、[維持]も、繰り返しの意味にでもならない限り、「し始める」が言えない」（森山 1988: 142）と述べている。

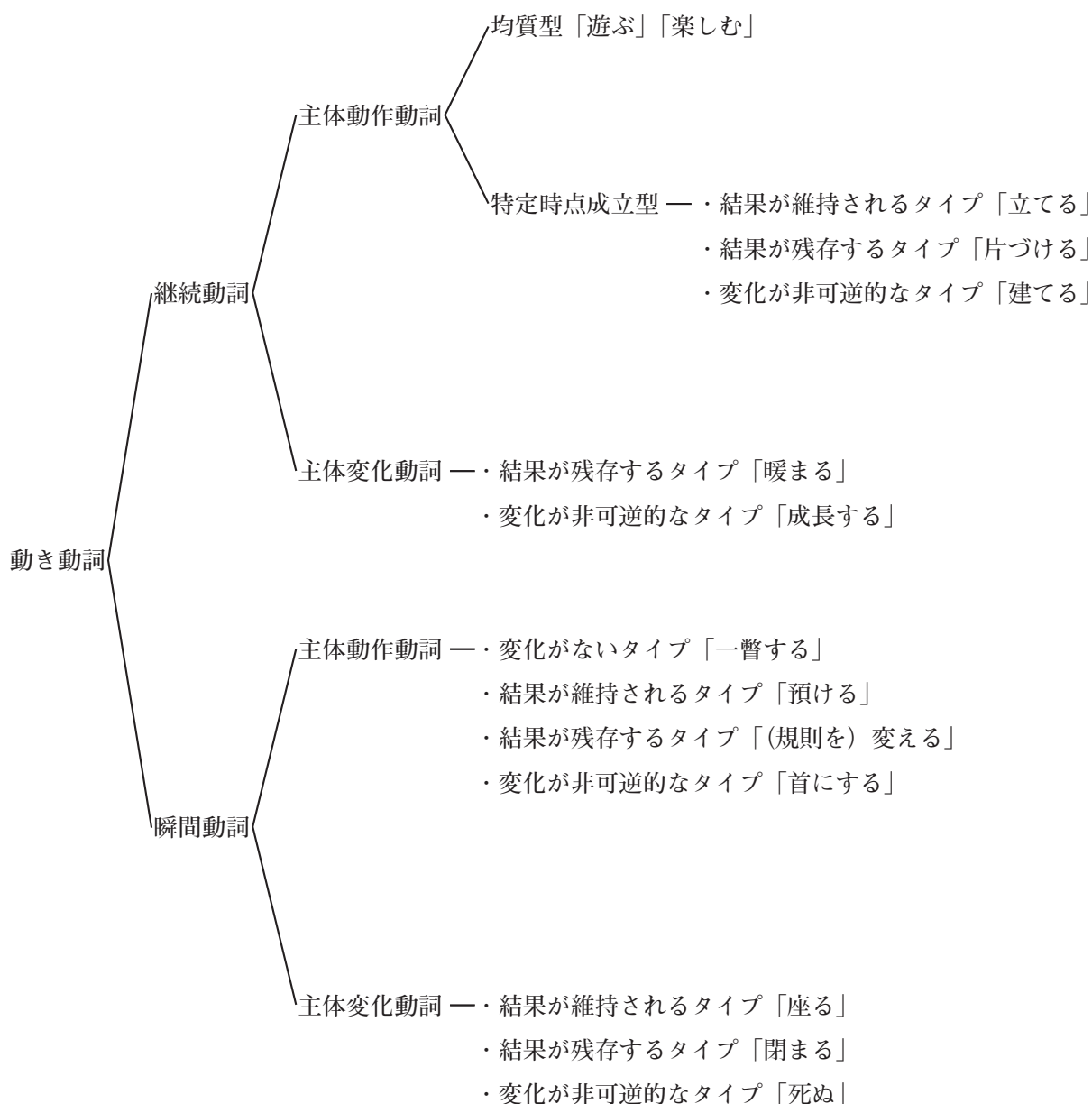
さらに「[維持]に対して、典型的運動としての動きが行われる局面は[過程]である。過程の有無は、「～し始める」が言えるかどうかによって調べることができる。これは、「～し始める」が、動きの展開の初めの部分を取り上げるからである」（森山 1988: 145）と述べ、このテストをもとにそれぞれの動詞句を「[過程]局面をもつ動詞句」と「[維持]局面をもつ動詞句」に分類している。

しかし、森山（1988）をはじめ、本節で扱う「動詞（句）分類と「はじめる」との関係」を中心とする先行研究には、共通して次のような問題点がみられる。

ひとつめは維持動詞の扱いである。たとえば上述の森山（1988）では、維持動詞は「はじめる」形について（くり返しの意味を除き）「言えない」と述べているが、その理由については述べられていない。それどころか、実際は本論文でも扱うように、くり返しや多回の意味を除いても森山（1988）

が挙げる「維持動詞（句）」に「はじめる」が後接して使用される例は（それほど多くはないものの）十分にみられるのである。また話者によっても容認度の判断が異なることもあり、森山（1988）が依拠する「文脈なしに「言えるか言えないか」というテスト」が不十分であることを示すものであると考えることができる²⁾。

動詞のアスペクト的意味分類をもとにして局面的意味との関連を述べたものに、日本語記述文法研究会（2007）がある。日本語記述文法研究会（2007）は動詞を状態動詞と動き動詞に分類し、動き動詞を以下のように分類した（日本語記述文法研究会 2007: 103）。



そして開始局面を表す「はじめる」との関係については「「しはじめる」と「しだす」は、どちらも動きが始まる段階を表す。開始段階が存在するのは時間的な幅のある動きなので、まえにくる動詞は、継続期間のある動きを表すものに限られる。（中略）継続期間がない動きを表す動詞は、「しはじめる」「しだす」の形は作れない。ただし、動きがくりかえされる場合は可能である」（日本語記述文

法研究会 2007: 36-37) としている。

しかし継続動詞のそれぞれの動詞類について、「このタイプの動詞は、動きの展開する過程をもつので」(主体動作動詞均質型, p106)「これらの動詞は、いずれも動きの展開する過程をもつため」(主体動作動詞特定時点成立型, p107)「変化が展開する過程をもつので」(主体変化動詞, p109)「しはじめる」の形で用いることができるのに対し、たとえば結果が維持されるタイプの動詞については「しつづける」の形で用いることができ、また結果が維持される期間を示すことができる(「佐藤は開催期間中ずっと看板を入り口に立てた。」 p107)と述べているのみである。

森山(1988)やその他の研究にも共通することだが、たとえば「動き／変化の展開する過程」「継続期間」「維持される期間」などの用語について特に定義はなされておらず、それぞれの動詞類の意味的特徴として挙げるには不十分である。そのため、たとえば「待つ」「眠る」などの動詞が「動きの展開する過程」をもつかどうかについては、けっきょく「はじめる」の形で用いることができるかどうかというところに収斂されてしまいかねないという問題がある。

また日本語記述文法研究会(2007)では「展開」という用語を用いて「動きや変化が展開する過程」をもつ動詞は「はじめる」の形で用いることができるのに対し、維持期間については「はじめる」の形では示すことができないとしているが、「はじめる」の形を用いるためにはなんらかの「展開」が必要であるとすれば、他の研究でも言及されている「習慣」的意味を表す場合(特に「くり返しの意味」を伴わないような場合)に「はじめる」形が多く用いられるという現象について説明することができなくなってしまう。

- (1) a. 彼がメガネをかけはじめたのは、ちょうどそこだった。
- b. 蜂巢川さん突然、ひどく派手な背広着はじめたんだ。(筒井康隆『文学部唯野教授』B)

「動作の過程」についてより明確な言及を行ったものには宮城(2004)がある。宮城(2004)では「はじめる」のもつ局面解釈を以下の3つに分け、局面解釈に関する単位動作の要件として以下の2つを挙げている(宮城 2004: 41-44)。

局面解釈 A: 「単一動作」の開始局面解釈: めぐみが歩きはじめる

局面解釈 B: 「単位動作の連続」の開始局面解釈: 生徒たちが次々に並びはじめる

局面解釈 C: 「単位動作の開始の局面解釈」の連続: 生徒たちが次々に歩きはじめる³⁾

局面解釈に関する単位動作の要件:

- a. 開始の〈局面解釈 A および C〉の要件: 単位動作が動作の過程を持つこと
- b. 開始の〈局面解釈 B〉の要件: 単位動作が動作の限界を持つこと

ここで宮城(2004)は局面解釈 A の要件として「単位動作が動作の過程をもつこと」とし、「動作の過程」について積極的に述べた個所で「動作の過程を表せるということは、開始限界を突破した時点において動作が一部成立していると認知できる場合である」と考える。この点において、動作が完全に成立している維持の開始の局面とは明確に区別されなければならない。例えば、動作動詞や「溶ける」、「渡る」などの一部の変化動詞は、「はじめる」形で進展の開始の局面を取り出すことができる。

これに対して、「帰る」、「(乗り) 越える」などの変化動詞は、「30 分で帰る」や「3 秒で乗り越える」というように、ある種の時間的な幅は想定できるにもかかわらず、「* 太郎が帰りはじめる」や「* 太郎が垣根を乗り越えはじめる」のように「はじめる」形が許容されない」(宮城 2004: 40) としている。しかしここで例として挙げられている「帰る」や「乗り越える」はいわゆる維持動詞ではなく、「動作が完全に成立している維持の開始の局面」が具体的にどのようなものであるのか、明らかではない。また「動作が一部成立していると認知できる場合」について、別の個所で「「溶ける」や「開く」などの動詞は、開始限界突破で、動作が部分的に成立する（「少し～した」のような表現が可能である）。これに対して「帰る」「立つ」などの動詞は、終了限界を突破するまで動作が全く成立しない」(宮城 2004: 49) として「少し～した」テストを持ち出しているが、「待つ」「黙る」「(目を) 閉じる」などの動詞は「少し待った」「少し黙った」「少し目を閉じた」などの表現が可能であるにもかかわらず、「はじめる」形は非常に難しいか、不可能である⁴⁾。またその反対に、作成動詞の多くは「少し～した」テストに合格するのはかなり難しいが、「はじめる」形は問題なく許容される（「?? 少し家を建てた」／「家を建てはじめた」, 「?? 少しパンを焼いた」／「パンを焼きはじめた」）。そのため、やはり宮城 (2004) の挙げた「単位動作が動作の過程をもつこと」「動作の過程を表せるということは、開始限界を突破した時点において動作が一部成立していると認知できる場合である」という基準もまた不十分であるといえることができる。

ほかに「はじめる」の局面的意味を形式化して示そうとしたものに Igarashi and Gunji (1998) がある。Igarashi and Gunji (1998) は、各原語彙項目 (proto-lexical items) は原辞書 (proto-lexicon) においてそれぞれ時間的変数 (temporal parameters) が定義されているとし、各変数 s (start time: 始点)・ f (finish time: 終点)・ r (reset time: 原状復帰点) の性質、およびそれぞれの (時間的) 関連性による動詞分類を行った。

さらに Igarashi and Gunji (1998) では、実際の使用においてはこれらの時点をすべて含む事象全体を表すことはできず、以下に示す 2 種類の視点 (view) を通してのみ事象が記述されるとする。

<i>The basic view</i>	view $\langle s, f \rangle$	
<i>The resultative view</i>	view $\langle sf, r \rangle$, where $r > sf$	(Igarashi and Gunji 1998: 85)

具体的には、 $s < f < r$ という時間的関連性をもつ「着る」という動詞の場合、それぞれの視点を通じた例として以下の文を挙げている。

- (2) a. ケンは毎朝母親の手を借りずに服を着る。(基本視点)
- b. ケンは毎日 3 時間だけ赤い服を着る。(結果視点)

(Igarashi and Gunji 1998: 85, 原文はローマ字表記)

そして「はじめる」については view-changing verbals のひとつであるとして、以下の形式的意味をもつと述べている (Igarashi and Gunji 1998: 88)。

$$\left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{adjacent} \\ \text{temp} \end{array} \left\{ \begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{view} \langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle \end{array} \right\} \right]$$

where $\boxed{1} < \boxed{2}$, $\text{visible}(\boxed{2})$ ⁵⁾

具体的には「はじめ（る）」は前接する動詞がとる view の始点を取り出す働きをもつとして、Igarashi and Gunji (1998) では以下の例文を挙げている。

- (3) a. ケンは5分前に着物を着はじめたが、まだ着ている。(基本視点)
 b. ケンがあ服を着はじめたのは三日前だ。(結果視点)

(Igarashi and Gunji 1998: 88, 原文はローマ字表記)

しかし Igarashi and Gunji (1988: 91) の記述では、他の先行研究では「はじめる」形をもたないとされている動詞類まで「はじめる」形が可能だという予測をすることになってしまう。Igarashi and Gunji (1998) に挙げられている具体的な動詞例は少ないが、そのなかでも基本視点では「待つ、黙る」 $\langle s^3, f^1, r^0 \rangle$ 、結果視点では「座る、結婚する」 $\langle s^3, s^2, r^2 \rangle$ 、「腐る」 $\langle s^3, s^2, r^1 \rangle$ などは Igarashi and Gunji (1998) の形式化では可能であるということになってしまうという問題が挙げられる。

2.2 ふたつの出来事との関係と「はじめる」

2.1 では動詞（句）の意味と「はじめる」との関係を中心にした先行研究をみたが、ここではふたつの出来事との関係性と「はじめる」との関係を中心にした先行研究をみる。

その中でも特に岩崎 (1988) は「局面動詞は、一つの動作の中における開始、終了、その間の持続といった局面だけを取り上げているのではない。局面動詞は、一定の構文のなかで局面動詞によってあらわされている出来事が、他の出来事と時間的な対比においてどのような関係になっているかという役割もある」(岩崎 1988: 47) として、他の出来事との時間的關係において「しはじめる」「しつづける」などの局面動詞の分析を行った。ここでは岩崎 (1988) の行った分析のうち、「[B] 出来事が2回」における「しはじめる」の分析をみる⁶⁾。

まず岩崎 (1988) は「(B・1) 二つの出来事が同時」の場合として「a. 局面動詞が主節にあるもの」と「b. 局面動詞が従属節にあるもの」に分け、前者については以下の例を挙げている（後者については「しはじめる」の例はないと述べている⁷⁾）。

- (4) a. 「… ときに、おい、まゆみ、ぼくに早くビールをくれよ。」と言いながら、よほどおなかかすいたと見えて、次から次へと頬ばりはじめたのでした。
 (小泉喜美子「冷たいのが好き」)
 b. 彼は飯を噛みながら、食卓の上に夕刊を拡げて、読みはじめた。(三浦朱門「偕老同穴」)

そして「それまでの出来事がそのまま、[しはじめる] はあとの出来事におけるはじまりをあらわしている」(岩崎 1988: 92) と述べ、二つの出来事と「はじめる」との関係を説明している。

次に岩崎（1988）は「(B・2) 二つの出来事が順次」の場合として「a. 出来事の間に時間差がない」場合と「b. 出来事の間に時間差がある」場合に分けているが、実質上はそれほど違いがないと思われるため、以下にそれぞれの例をまとめて示す。

- (5) a-1. 伊藤はそう言ってニヤリと笑い、一握りの葉をのみはじめた。（三浦朱門「偕老同穴」）
a-2. 雨はようやくやんだが、あたりはすっかり暗闇に包まれはじめた。（遠藤周作「札の辻」）
b-1. 経営合理化を至上命令に気骨のあるプロデューサーやディレクターが配転されると、万事ことなかれ主義がテレビドラマの世界にはびこりはじめた。（小林久三「赤い落差」）
b-2. 彼はさり気なくぼくの横に立って、ペチカの火に尻をあぶりはじめた。
(草野唯雄「トルストイ爺さん」)

そしてそれぞれについて、前者については「二つの出来事のうち前の出来事がおわり、すぐに次の出来事が行われ、その開始を「しはじめる」があらわしている」（岩崎 1988: 93-94）、また後者については「前と後の出来事の間に時間差があるものであり、後の出来事の開始を「しはじめる」があらわしている」（岩崎 1988: 95）と述べ、さらに「2 回の出来事の場合、ふたつの出来事の時間的な差に関係なく常に、後の出来事の開始の局面をあらわす」（岩崎 1988: 101）とまとめている⁸⁾。

岩崎（1988）はこのように「二つの出来事の関係」と「はじめる」とを関連づけた研究であり、本論文でもこの立場をひとつの中心として「はじめる」の表す意味を分析するのであるが、それでもいくつかの問題点を挙げることができる。

そのひとつは、上に挙げた (B・1) の分類基準（「a. 局面動詞が主節にあるもの」と「b. 局面動詞が従属節にあるもの」）と (B・2) の分類基準（「a. 出来事の間に時間差がない」場合と「b. 出来事の間に時間差がある」場合）がかなり異なり、またそのために十分な一般化が見逃されてしまっているということである。特に後者の場合、局面動詞が主節にある場合と従属節にある場合ではかなりその意味が異なってくる。

ふたつめは、他の先行研究にあるような「動詞の種類（あるいは事態の種類）による違い」についてほとんど述べられていないことである。たとえば岩崎（1988）の述べるような意味を「はじめる」が表すのであれば、動詞が表す出来事は「開始時点」をもつものでなければならないし、開始時点があっても「はじめる」を用いることができない、あるいは難しい動詞もあるはずであるが、岩崎（1988）ではそれらの関係についてはいっさい述べられていない。

二つの事象との時間的関係を取りあげた他の先行研究に、高橋（2003）がある。高橋（2003）は局面動詞「はじめる」が使用される場合として「全体のなかでの他の局面との関係を問題にするとき」および「ふたつの運動を時間的に関係させるとき」があると述べ、岩崎（1988）を挙げたあとで以下のように述べている。

2) 概観を前提にした精密化のなかで

たいていの動詞は局面に分解することなく、運動をさしだしているのである。（中略）動作動詞の完成相は、始発の局面をとりだして述べることができる。（中略）始発の局面がすなわちこの動作なのである。それは、あたかも、行列の先頭がみえたときに、「あっ 行列の 先頭が

きた。」といわないで、「あっ 行列が きた。」というようなものである。(中略) 特定の局面であることをとりだすのは、全体のなかでの他の局面との関係を問題にするときである。(中略) こうした精密化は、全体把握のための概観を前提とするので、動作の成立と同時の発言にはでてこない。一定時間をおいてからの、回想的・記録的な発言や記述のなかにでてくるのである。

3) 他の運動との時間的な関係

局面動詞は、いまのべたように、ひとつの運動の内部構造の記述にもつかわれるが、実際に多くみられるのは、他の運動との関係の記述のばあいである。(中略) 刑務所のへいにそってあるいていて、最後まできたとき、「ここで 刑務所が おわって、ここから 工場が はじまる」という。(中略) このことは、時間的な構図のなかでもおこることで、ふたつの運動を時間的に関係させるときに、局面動詞がつかわれる。(高橋 2003: 198-199)

しかし高橋 (2003) の記述は概略的なものであり、局面動詞が使用される場合とその状況について直観的に述べられているものの、特に上でも指摘したような動詞や事象の制限については述べられていない。

本論文では、岩崎 (1988) や高橋 (2003) の示すこれらの「事象間の関係」という視点を重視しながら、局面動詞の「はじめる」が用いられる場合を3つに分類することにより、先行研究で述べられてきた諸特徴のほか、これまで指摘されていなかった事実を指摘し、その理由について分析を行う。

3 局面動詞「はじめる」に関連する3つの意味

本節では局面動詞「はじめる」が使用される場合について、はじめに「はじめる」が基本的にもつ意味について確認したのち、「経路に関連する「はじめる」(3.2)」「タクシスに関連する「はじめる」(3.3)」「特定時点に関連する「はじめる」(3.4)」について考察を行う。

3.1 局面動詞「はじめる」の表す基本的意味

さまざまな場合に用いられる局面動詞「はじめる」の基本的意味としては、これまで先行研究でいわれてきた意味でよいと考えられる。たとえば小田 (1986) は「運動のはじまりの局面とは、その運動のない状態とその運動の持続の局面との中間に位置する局面であって、その局面の次には、必ず持続の局面が来ることを前提として成り立つ。(中略) 「～しはじめる」という局面動詞をつくることのできる動詞は、すくなくとも、〈はじまり〉と〈持続〉⁹⁾の局面をもつ運動をあらわしうるものでなければならない」(小田 1986: 14-15) と述べており、「はじめる」は「連続的な個別的な運動のはじまり」、すなわち「個別的な運動が連続的につづいている過程におけるはじまりの局面をとりたてている」(小田 1986: 15) としている。したがって多くの先行研究が指摘するように、点的事象をあらわす動詞は多回・複数生起事象解釈をとらない限り、「はじめる」形をもつことは難しい (cf. 「*一瞥しはじめる」「*届きはじめる」)。

「はじめる」形がしばしば習慣的事態や複数事象生起解釈をもつのは、この「持続」局面と関連がある。すなわち、特に持続期間が長期にわたる場合、その「持続される状態」は単一事象の結果状態として解釈されるよりは、なんらかの「習慣的状态」などのような(ある種ゆるやかな)状態が持続されて

いると解釈されるほうが自然となる場合が多いためである¹⁰⁾。

これらの「はじめる」の意味を形式化して記すなら、第2節で挙げた Igarashi and Gunji (1998) の示すような形式を考えることができる¹¹⁾。

しかし局面動詞「はじめる」の基本的意味が上述のものであるとしても、第2節でみたように、先行研究（とくに森山（1988）や日本語記述文法研究会（2007）など）では、一時点的な事象だけではなく維持事象についても「はじめる」形は用いることができないとし、また実際の使用例においてもかなりの偏りがみられることも事実である。

以下では、基本的には局面動詞「はじめる」の意味は小田（1986）や Igarashi and Gunji (1998) の示すもの（あるいはそれに近いもの）と考えるにもかかわらず、上述のような動詞における偏りが生じる理由、および先行研究で述べられている含意（「動作の展開」や「くり返し解釈強制」など）について、局面動詞「はじめる」があらわれる文脈およびそれぞれの意味を関連づけながら示す。

ただし以下で示す3つの「はじめる」形のあらわれる文脈は、互いに排他的なものではなく、むしろ積極的に相互作用しながら「はじめる」形式をささえていると考えるものである。少しくだけて言えば、それらは無標の形式（非「はじめる」形）を用いずに「はじめる」形式を用いる必然性を高めるひとつひとつの「要因」としてはたらく、と言ってもよいだろう。

3.2 経路に関連する「はじめる」

ここでは経路的意味に関連する「はじめる」について述べる。

経路的意味に関連する「はじめる」は、3.3 で述べるタクシスや3.4 で述べる特定の時点との関連づけとは異なり、他の出来事や時間軸上の点とは関係なく、当該の事象のみで構成されうるという特徴をもつ。ここでいう「経路」というのは物理的な経路だけではなく、状態や数量を表すスケールに関するものを含む¹²⁾。以下、それらを具体例で確認する。

はじめに物理的な経路の例を挙げる。

- (6) 辻は宿院を出て山径を黒谷の方へ歩きはじめた。（瀬戸内晴美『諧調は偽りなり』B）

また対象が消費あるいは作成されることをつうじて対象が「経路」となる場合もある。

- (7) a. 何も言わずに食べはじめた。

- b. あみ子が一步を踏む度にペッタピッタと鳴り響く。そのリズムに合わせて頭の中で聞いたことのあるメロディーと歌詞が流れ始めた。（今村夏子「こちらあみ子」）

- c. 観念したらしく、ピーターは白状しはじめた。（喜多嶋隆『涙のブラディ・マリー』B）

経路をもたない場合、同じ動詞であっても「はじめる」形をもちにくい場合がある¹³⁾。

- (8) a. 彼はテレビを見はじめた。

- b. ?彼は外の景色を見はじめた。

「はじめる」形と変化の漸次性については先行研究でもいくつかの言及がある¹⁴⁾。たとえば小田(1986)は変化動詞の「はじめる」形について、「変化が徐々に進行する過程そのもののはじまりをあらわす」(小田 1986: 18)として、変化の結果の局面をとらえる継続相(「ている」形)と異なることを述べている(が、その理由については述べていない)。また人間の心理活動をあらわす「おもう、かんがえる、意識する」や主体の感情的態度をあらわす「にくむ、愛する、なれる」などの動詞の「はじめる」形についても、「「～しはじめる」という局面は、質的な変化であるが、その変化は、ここでは瞬間的なものではなく、量的な、漸次的な段階をとるととらえたほうがよい場合もあるだろう」「「～しはじめる」がさししめす局面は、やはり、瞬間的ではなく、漸次的な段階をとる場合が多い」(小田 1986: 17)と述べ、以下の例を挙げている。

(9) 鶴子は次第に、相手が正常ではないのだと思いはじめた。(たまゆら)

これはここで述べた「経路的意味」を考慮に入れると、以下のように考えることができる。すなわち、変件事象において状態のスケールをもち、したがって変化経路をもつのは「変化が徐々に進行する過程」局面であり、その場合は「はじめる」形を用いてその局面をとりだすことができるのに対し、「変化の結果の局面」を「はじめる」形を用いて取り出すことができないのは、その局面が経路をもたないためである。

また新たなスケール(およびそれに沿った経路)が生じる場合として、一般的に程度や数量的なものが強制解釈として生じることはよく知られているが(cf. Jackendoff 1991, 岩本 2008)、ここでもやはり程度や数量に関係する解釈が強制される場合がある。たとえば次の(10a)においては、「期待する声(の高まり)」の大小というスケールが設定されており、また(10b)においては「軽い怒り～通常の怒り～激しい怒り」という怒りの程度のスケールにもとづく経路が生成されている。

- (10) a. 国民もこの苦しみを軽減してくれるのなら、とパニッチに期待する声が高まりはじめた。
(高木徹『ドキュメント 戦争広告代理店 情報操作とボスニア紛争』)
- b. 「性懲りのないやつらだ」忠秋らも本当に怒りを見せはじめた。 鋒打ちの刀にも自然と力がこもってきた。(南原幹雄『寛永風雲録』B)

また事象の複数性などを用いて数量的な経路が生成される場合もある。

- (11) a. わたしたちが夜の川原で集まったとき、それはけっきょくのところ園遊会のようなものに似ており、《なかま》たちはサロン風の楽しい会話のうちに、いくつかの恋愛のカプルをつくりはじめていた。(倉橋由美子「パルタイ」)
- b. この時期に成人のカード利用が頭打ちになり、クレジットカード会社が新しい経営戦略として、無職でも使えるお金を持っている学生をターゲットにし始めたからだ。
(堤未果『ルポ 貧困大国アメリカ』)
- c. すると、他の動物たちも競って自家用車を持ちはじめます。
(上岡直見『自動車にいくらかかっているか』B)

そして経路の漸進的意味と関連する「はじめる」の場合、基本的にはスケールの（ほぼ）最小の値から、多くの場合はそれほど大きくない値に至るまでの変化を表している。これは名詞形の「はじめ」という語義とも一致する。

ここで、「はじめる」形が経路の漸進的意味と関係したり、場合によっては強制解釈によって経路漸進的意味を生成したりする理由については、以下のように考えることができる。

経路をもつ事象の場合、その経路における対象の位置（および経路の始端と終端）をみることにより、現在（あるいは特定の時点）におけるその事象内の位置をはかることができる。たとえば経路の始端に近い部分に対象が位置していれば、事象自体もまだ「はじまり」の部分であることが分かり、また反対に対象が終端に近い部分に位置していれば、事象自体も「おわり」に近いことが分かる。それに対して経路をもたない事象の場合であれば、現在（あるいは特定の時点で）継続している事象においてその段階が「はじまり」の部分であるのか「おわり」に近い部分であるのかを判定することはできない。そのために「はじめる」形を用いて表すことのできる意味のひとつに「経路上の初期の段階である」ということ（すなわち「その出来事がはじまったばかりであること」と「これからさらに変化が進展していくこと」）を示す経路的意味があり、場合によっては解釈強制でその意味を生成することができるのであると考えることができる。

また、経路が示された場合、出来事の「はじまり」の時点がはっきりすることも、「はじめる」形を使いやすくする要因のひとつであるといえるだろう。

3.3 タクシスに関連する「はじめる」

局面動詞「はじめる」が関連する意味は、前節で述べた「経路的意味」だけではない。本節では局面動詞「はじめる」がもつタクシスの機能、すなわち前後の出来事との関係を示すために用いられる場合について詳しくみる。このタクシスの機能についてはおおよそ第2節において紹介した岩崎（1988）および高橋（2003）が述べていたものである。本節では前の出来事との関係のほかに、次の出来事との関係を示すためにも「はじめる」形が用いられることを示す。

はじめに前の出来事との継起的関係を表すために用いられる「はじめる」形の例を挙げる。

- (12) a. 「いずれはそうなるかもしれない」と、天使は答えた。間もなくガブリエル社提供の番組が流れはじめた。（星新一「天国からの道」）
- b. あなたは（中略）黒目を顔の中央にひきつけ、わたしをみつめているようすだった。それからあなたは眼鏡をはずして泣きはじめた。（倉橋由美子「パルタイ」）
- c. あみ子と二人きりのときは黙ったままのり君だが、そこにひょっこり大人が加わると、突然しゃべり始めることがある。（今村夏子「こちらあみ子」）

またタクシスの意味を表す場合、次の出来事との関係を示す場合にも「はじめる」形が用いられる。その場合、ひとつの出来事が継続しているあいだに次の出来事が起こるというタクシスの関係を表すため、前者の出来事に「はじめる」形が用いられる。

- (13) a. 彼女が休み始めてから、電話でのやり取りが続いた。

(武蔵国際総合学園編『不登校と向き合う』B)

- b. しかし、いざ知覚について実際に議論し始めると、どうしてもカメラ・モデルで事態が思い浮かべられてしまうのが常である。(廣松渉『哲学入門一步前』)

この二つのタクシスの意味をあわせもち、「はじめる」形を用いて3つの出来事の時間的先後関係を表す場合も多くみられる¹⁵⁾。

また岩崎(1988)が挙げた「(B・1) 二つの出来事が同時」という場合も、「はじめる」形がふたつの出来事のタクシスの関係を表しているということができる。この場合は、上で挙げた継起的関係ではなく「同時的關係」を表している。これは岩崎(1988)の挙げる例でも顕著なとおり、ひとつめの出来事を「ながら」節によって表すことにより、ふたつめの出来事の始点はその出来事の時間内にあるということを示すためである。

また事象の先後関係を示す「タクシス」という語義からは外れるが、単独事象の発生／生起を示す「はじめる」もここに含めておく¹⁶⁾。

- (14) a. 突然、雨が降りはじめた。
b. 彼はいきなりあたりを見回しはじめた。

3.4 特定時点に関連する「はじめる」

さらに「はじめる」形を用いて特定の時点と直接関係をもたせる用法がある¹⁷⁾。この用法については大きく次のふたつに分けることができる。

1) 他の事態に対する時間的視点 (temporal viewpoint) を導入する。

事象の始点から現在(あるいは特定の時点)までの時間量を述べる場合(15a, b)や、その間の事態について述べる場合(15c)がある。

- (15) a. 出会った時から20年、いっしょに住み始めてからでも、もう14,5年たちます。
(東京都豊島区男女平等推進センター編『男が語る一家族・家庭』B)
b. ジュニアと私が一緒に暮らし始めて、もう二カ月がたつ。(山田詠美『24・7』B)
c. アマは私と暮らし始めてから一度も無断で外泊なんてした事ないのよ。
(金原ひとみ『蛇にピアス』B)

また事象の始点を時間的視点として定位し、他の事象との関係などを述べる場合もある。

- (16) a. このあたりを不審者がうろつきはじめたのは、2か月ほど前のことだった。
b. このあたりを不審者がうろつきはじめたころ、最初の事件が起こった。

2) 出来事の始点を時間表現で表される特定の時点に位置づける。

この場合は1)とは反対に、「最近」「3年前に」などの時間表現(時点表現)を用いて出来事の始

点を定位することになる。形式的には反対の関係になるが、時間関係的な意味合いは、(16)の場合とほとんど変わらないといえる。

(17) 最近、犬を飼いはじめた。(＝犬を飼いはじめたのは、最近だ。)

基本的に「はじめる」形と時間軸との関係を表す場合はこの用法であると考えるが、たとえばある時点を特定する場合に、出来事を媒介して時間軸にその時点を位置づける場合がある。その場合は以下に示すとおり、前節のタクシスの意味に近いものとなる。

(18) a. 三月になると、早くも遣唐使たちの帰国のことが噂に上り始めた。

(天平の薨：小田 1986 の例)

b. 彼がそう言った時以来、わたしたちは彼に不審の念を抱きはじめた。

無標の形（非「はじめる」形）と「はじめる」形の意味的な違いは、「はじめる」形の場合、その出来事が現在（あるいはその後の特定の時点）も継続していることを含意する¹⁸⁾ということである。これは前節で見たタクシスの「はじめる」と共通する。

(19) a. いつから きみは飼いはじめたのかいじわるで卑しい犬の子を

(河原晋也『幽霊船長』B)

b. いつ、君は犬の子を飼ったのか。／？いつから 君は犬の子を飼ったのか。

(20) a. 閻鬼があらわれはじめたのは、ざっと二年まえ。

(あさのあつこ作；塚越文雄絵『時を超える SOS』B)

b. 閻鬼があらわれたのは、ざっと二年まえ。

無標形を用いた場合、特定の事象がいわゆる「まるごと」発生した時点を表すことができるのに対し、「はじめる」形を用いた場合はその事象（あるいは特定の事象のくり返し）の始点の発生時点を明示的に示すため、その後もその事象が継続しているということを含意することができる。その場合、事象は単一のものでも、複数のものでもよい。

以上、第3節では局面動詞「はじめる」が使用される場合を3つに分類し、それぞれの場合について分析を行った。次の第4節では、ここでみたそれぞれの場合について、動詞類や共起表現・構文などの観点から分析を行う。

4 それぞれの「はじめる」形と動詞・共起表現

4.1 経路的「はじめる」と動詞・共起表現

経路と関連する「はじめる」形を用いるためには、「はじめる」形で始点を取り出される当該の事象はなんらかの経路をもたなければならない¹⁹⁾。はじめに物理的な移動経路をもつ「移動動詞」の例を挙げる。

- (21) 怒り狂う同回生の男連中が下級生に良いところでも見せようと思ったのか、体が濡れるのを厭わずに川を渡り始めたので、我々は慌てた。(森見登美彦『四畳半神話体系』)

動作動詞を用いて始点と終点をもつ事象を表していても、経路をもたない事象の場合はこの用法の「はじめる」を用いることができない(たとえば「?? 待ちはじめる」「? 眠りはじめる」など)。

それと同じく、いわゆる「維持動詞」類についても、維持局面においては経路をもつことがないため、経路的意味と関連する「はじめる」を用いることができない²⁰⁾。

- (22) a. ?? 立ちはじめる, ?? 座りはじめる (姿勢自動詞)
b. ?? 握りはじめる, ?? 触れはじめる, ?? 挟みはじめる (体勢維持動詞)
c. # 持ち上げはじめる, # 着はじめる (再帰他動詞)
d. # 窓を開けはじめる (状態変化他動詞)

「着はじめる」「窓を開けはじめる」などの場合、先行研究でも指摘されているように (cf. 小田 1986 など), 状態変化局面については「はじめる」形を用いて表すことができるが、変化達成後の維持局面については「はじめる」を用いて表すことが難しい(あるいはほぼ不可能である)。それは、3.2 でも述べたように、状態変化局面においては対象の状態を示すスケールを用いてこの「経路的意味」を表すことができるのに対し、維持局面においては経路として利用できる対象をもたないためであると考えられる²¹⁾。

また、物理的な経路をもつ移動動詞のほかに、対象そのものが経路としてはたらく「消費動詞」や「作成動詞」(で表される事象)も同じようにこの意味での「はじめる」を用いることができる。

- (23) a. 私もうどんの箸を取って食べ始めた。(齋藤寛『鉄の棺』B)
b. 「あり合わせの材料で、夜食用の洋風雑炊を作りはじめたんです」
(吉村達也『心象童話』B)
c. まず合戦の舞台を厳島と定め、そこに城(宮尾城)を築き始めた。
(歴史の謎研究会編『図説日本人が知らなかった戦国地図』B)

そのほか、上でも少し述べたように、対象の状態スケールを経路としてとることができる場合²²⁾、いわゆる漸進的变化局面をもつ達成動詞(客体変化動詞)や状態変化自動詞(主体変化動詞)も「はじめる」形を用いて経路的意味を表すことができる。

- (24) a. 鍋に熱湯を沸かし、塩適宜を入れてスパゲッティをゆで始める。
(『夏を味わう野菜のおかず』B)
b. 扉は男が通ったあとも動き続け、やがて一ぱいまで開くと、今度は逆に閉じ始めた。
(佐野洋『さて、これから…』B)
c. 善彦はすぐに起きて服を着始めました。(曾野綾子『この悲しみの世に』B)
d. わたしたちはある部屋のなかにいた。それは壁の割れはじめた汚い部屋で、途方もなく

巨大なビルディングのなかの迷路の奥にあった。(倉橋由美子「パルタイ」)

e. エレベーターが上昇しはじめた。

経路を含意しない動詞の場合、これも 3.2 で述べたように、なんらかの経路をもつ解釈が要請されることになる。たとえば「許す」という動詞²³⁾を用いた場合、そのひとつの解釈として (25a) では「(心の) 許し」そのものに関するスケール (全く心を許さない～少し心を許す～かなり心を許す～完全に心を許す) が用いられるのに対し、(25b) の例ではおそらく許す案件あるいは回数などの数量に関するスケールが経路解釈をささえている。

(25) a. そんな宗佐に高俊の方も心を許しはじめたようだった。(井ノ部康之『千家分流』B)

b. でも、それをここ三、四年許しはじめたことが、結構大きいかもしれないですね。

(野田秀樹『定本・野田秀樹と夢の遊民社』B)

また次の例も「メディアの注目の浴び具合」に関するスケールを経路とする「はじめる」用法であると解釈することができる。

(26) その重要人物は、最近サラエボからアメリカ大陸に帰ってきて「強制収容所など存在しない」という発言を繰り返しており、困ったことにメディアの注目を浴び始めていた。

(高木徹『ドキュメント 戦争広告代理店 情報操作とボスニア紛争』)

強制解釈のひとつとして数量的な経路を生成し、参与者や事象の複数性をもたらす経路的「はじめる」の分析と例については、すでに 3.2 で扱ったのでここではとりあげない。

また経路的意味を表す「はじめる」と共起しやすい副詞的修飾表現には、経路の進行具合を修飾するものが挙げられる。次の例ではそれぞれ「じわじわ」「すこしずつ」「しだいに」などが用いられている。

(27) a. この日から、ガットマンの記事がじわじわとワシントンに波紋を広げ始めた。

(高木徹『ドキュメント 戦争広告代理店 情報操作とボスニア紛争』)

b. わたしはしかし、いまではこうした環境にすこしずつ慣れはじめていようであり…

(倉橋由美子「パルタイ」)

c. 人々はしだいにスピードのあるものを好むようになり、漫画映画を求めはじめたのだった。(星新一「天国からの道」)

また数量を経路とする場合、複数参与者を示す「次々に」「ぼつりぼつりと」などが経路的「はじめる」とともに用いられている。

(28) a. 昭子はネオンがぼつりぼつりと灯り始めた裏通りを先に立って歩き出した。

(江波戸哲夫『部長漂流』B)

- b. 少しずつだが新芽を見せ始めている。(Yahoo! ブログ, 日本, B)

4.2 タクシスの「はじめる」と動詞・共起表現

ふたつ以上の出来事のタクシスの関係を示す「はじめる」については、まず出来事間をつなげる表現を取りあげる。

二つの出来事の（時間的）近接関係を表す接続助詞としてはじめに挙げられるのが「と」である。

- (29) しかしながら、考え始めると、唯名論の立場で押し通すのにはいろいろと無理が伴うことが判ってくる。(廣松渉『哲学入門一步前』)

また同時的関係を表す場合、岩崎（1988）でも挙げられていた「うちに」を用いてつなげることができる。

- (30) 読み進めるうちに、阿坂龍一郎の背中に、冷たい汗が流れ始めた。

(北森鴻『メビウス・レター』B)

また出来事の継起性を表す接続詞「そして」「それから」などが先行することも多い。

- (31) a. 「しかし切れる人だろう、あの人は」と私は同僚の一人にたずねた。「そりゃ切れば切れる人だろうね。だが妙なプリンシプルがあるらしくてな、自分からは何もしないのだ。あきれるほどの潔さだよ……」と彼は教えてくれた。そして私はあらためてこの先輩を観察しはじめた。(古井由吉「先導獣の話」)

- b. それからは、いつか《労働者》を理解できるかもしれないという希望がわたしの毎日を養いはじめた。(倉橋由美子「パルタイ」)

副詞的修飾表現としては、時間的に後行する事象との関係を示す「先に」などが用いられる。

- (32) 先に食べておく／先に食べはじめておく

この場合、3.3でも述べたように（あるいはすぐ後で述べるように）、限界事象は無標形（非「はじめる」形）で事象全体が「先」に完了する意味をもつ（ことができる）ため、先行事象が現在も継続中であることを示すために「はじめる」形を用いて意味を明確にすることができる。

また3.3の最後で述べた単独事象の発生／生起に関連する「はじめる」の場合は、事象の発生／生起に関連する副詞的表現が共起するが、「突然」「いきなり」「だしぬけに」などの突発的生起を表すものが多いようである。

次に事象（および動詞（句））の分析にうつる。

まず限界事象（およびそれを表す動詞句）の場合、無標の形²⁴⁾で用いるときは当該の事象の限界

点を越える（＝事象が完了する）という意味あいをもつので、複数の事態の関係において、視点が先行する事象の最中にある場合（すなわち先行する事象の継続中に次の事象が始まるというタクシス関係を表す場合）、先行する事象を表す動詞に「はじめる」を用いる必要がある。無標の形を用いた(33b)では「食事後に眠くなってきた」という解釈も十分に得られる。

- (33) a. 彼は書類の確認を済ませると、夕食を食べはじめた。すると、急に眠くなってきた。
b. 彼は書類の確認を済ませると、夕食を食べた。すると、急に眠くなってきた。
c. われわれは日常、あるがままの事物ということをししばしば口にすることが、事物なるものは分析し始めると、たちどころに既成的・日常的なイメージではとうてい把えきれないこと、そして、自然科学的な事物論でさえ、たちまちにして認識論的な省察を要求するに及ぶこと、このことまでは已にご理解いただけたはずである。(廣松渉『哲学入門一步前』)

またいわゆる「非限界動詞」であっても、デフォルトの解釈として「出来事全体をさしだす」有界事象として解釈されることが多い²⁵⁾。

- (34) a. 彼は書類の確認を済ませると、大声で笑った。すると、子どもがやってきた。
b. 彼は書類の確認を済ませると、大声で笑いはじめた。すると、子どもがやってきた。

(34a) の例ではすでに笑い終えているという解釈も十分に可能であるが、(34b) の例では彼は「笑い終えていない」（すなわち「笑い」が継続中である）ことがはっきりと表されている。

そして維持動詞はこの意味でも「はじめる」形をもつことは難しい。

- (35) 彼は書類の確認を済ませると、椅子に座った。すると、急に眠くなってきた。

この例では、維持動詞のタ形「座った」という形ですでに状態変化が完了していることが表されており、ここからあえてコストの高い「維持事象の継続中である」という意味をもたせるための「はじめる」形を使用する積極的な理由がないため、「座りはじめた」という表現が使用されないと考えることができる。同様の例として、以下の対比を挙げる。維持動詞類の「はじめる」形は、むしろ状態変化を起こす動作事象部分（あるいはいわゆる「変化の局面」）の開始を表している。

- (36) a. そう言うと、彼は車に乗った。
b. # そう言うと、彼は車に乗りはじめた。

ただし、上でも述べたように、文脈がそろえばいわゆる「展開」がない動作動詞や維持動詞であってもタクシスの「はじめる」形は十分に可能である^{26), 27)}。

- (37) a. ?? 彼は待ちはじめた。
b. 「それではここで待たせていただきます」と言うと、彼はほんとうに椅子に腰かけて彼

女の帰りを待ちはじめた。

- c. ?? 黙りはじめた。?? 立ちはじめた。
- d. わたしの傍らへ来ると並んで立ちはじめた。(志水辰夫『あした蜚蜉の旅』B)
- e. わたしも友だちに聞いて持ち始めたら、すぐにカレからコクハクされた♡

(My Birthday 編集部『ときめき～恋するオトメのおまじない』B)

「はじめる」が用いられる事象の継続中に次の事象がはじまるということで、タクシスの同時的意味であることを示す「ている」形を用いるということも考えられるが、「ている」形などの状態形を用いると、「はじめる」が用いられる事象と、その先行事象との関係が不明瞭になる場合がある。

- (38) a. ?? 彼は書類の確認を済ませると、夕食を食べていた。すると、急に眠くなってきた。
- b. 午後3時を過ぎると、雨が降りはじめた。
- c. ?? 午後3時を過ぎると、雨が降っていた。

そのためこのようなタクシス関係を表すためには(38b)のように表すことになる。

また「待つ」「考える」などの動詞は始点がはっきりしない事象を表すことが多く、「??6時に／から待つ」「??6時に／から考える」(cf. 「6時にテレビを見る」「6時から走る」)というように出来事の開始時点を特定する表現とは共起しにくい。基本的にはタクシスの意味と関連する「はじめる」形式でも表しにくい(「?? 待ちをはじめた」)。これは意味的に開始時点がはっきりしていないため、先行事象との時間的関係づけが難しくなるからであると考えられることができる。

ただし以下の場合であれば、これらの動詞もタクシスの意味と関連する「はじめる」形をもつことができる。まずは事象の順序が明示的に示されている場合である。

- (39) a. 彼にそう言われてから、自分でもそのことについて考えはじめた。
- b. 「それではここで待たせていただきます」と言うと、彼はほんとうに椅子に腰かけて彼女の帰りを待ちはじめた。(＝(37b))

次にこれらの動詞の「はじめる」形が先行する事象を表す場合である。

- (40) a. しかしながら、考え始めると、唯名論の立場で押し通すのにはいろいろと無理が伴うことが判ってくる。(＝(29)) (廣松渉『哲学入門一歩前』)
- b. われわれは日常、あるがままの事物ということをしばしば口にするが、事物なるものは分析し始めると、たちどころに既成的・日常的なイメージではとうてい把えきれないこと、そして、自然科学的な事物論でさえ、たちまちにして認識論的な省察を要求するに及ぶこと、このことまでは已にご理解いただけたはずである。(＝(33c))

(廣松渉『哲学入門一歩前』)

(40) の場合、事象の始点時が特定されなくとも、(40a) の例であれば「考えていなかったとき」と「考

えているとき」の間に始点時の存在が含意されるとともに、(39)とは異なり、「考える」事象の継続中に後行事象が開始されるというタクシス関係を表しているため、事実上開始時点が明確でなくとも十分にタクシス的意味をもつことができるのである。

また遠くからの時間的視点が可能である場合（たとえば「なんとなく考えはじめた」などのように正確な開始点がわからなくてもかまわないような場合）にも、タクシス的な「はじめる」を用いることができる（しかしこの場合については、実際は漸次的意味とあわせて「はじめる」が用いられる場合が多いようである）。

4.3 特定時点「はじめる」と動詞・共起表現

タクシス的意味の場合は複数の出来事の時間的關係を表すものであったのに対し、特定時点「はじめる」は直接時間軸に事象の始点を定位するものである。したがって始点を特定する時点的表現とあらわれる場合が多い。

(41) a. 先週から付き合い始めました。

b. きょうから 24 時間 TV の CM 流れ始めたって～（Yahoo! ブログ, B）

また構文的には、注 17 でとりあげた小田（1986）が示したような、「～はじめて（時間）になる」「～はじめたのは（時期）だ」という形式の例が多くみられる。

動詞句についてみると、時点導入と関連する「はじめる」形の場合、いわゆる「動作の展開」がほとんどない動詞であっても比較的違和感なく用いることができる。

(42) a. 仮に病気で会社を休みはじめて 3 日目に退職したとすると、連続 3 日間の待期が満たせなかったことになり…

（新村健生監修『退職・転職の「年金・保険・税金」がわかる本』B）

b. 仔ガメの時から飼い始めて 5 年目です。（Yahoo! 知恵袋, 動物, 植物, ペット, B）

c. 今日は正式に付き合いはじめてから初めてのデートなのだ。（新井輝ほか『To heart』B）

状態変化維持動詞については、「いま（あるいは特定の時点）もその状態が継続している」という含意を、無標の形ではなく「はじめる」形を用いてより明示的に表現することができる。

(43) a. 魔の椅子に座って数時間がたったが、まだぴんぴんしている。

b. 魔の椅子に座りはじめて数時間がたったが、まだぴんぴんしている。

(43) の場合、無標の非「はじめる」形では「座る」という状態変化が数時間前にあったことを示しているが、現在の状態についてはいずれの解釈も可能である。それに対して「はじめる」形を用いた後者の場合、数時間ずっと座り続けていることが明示的に示されている。

ただしこれは必須ではなく、むしろ非「はじめる」形で十分に状態の継続を含意することができるため、「はじめる」形を用いるためには当該の状態が継続しているということを積極的に明示しな

ればならないような強い文脈が必要となる場合もある。これは実際の使用において用いられる動詞や、その状態の継続がどの程度一般的かという知識などによって異なる。次の例では、「握りはじめて」という「はじめる」形を用いなくてもその状態が状態変化後も継続している（すなわち一度手を握ってすぐに離れたわけではない）ということが自然に含意されている²⁸⁾。

(44) 彼が彼女の手を握ってだいぶたっても、二人はずっと黙ったままだった。

非限界動作動詞の場合はどちらの形式も可能であるが、タクシスの「はじめる」同様、文脈によっては無標形が有界的解釈を引き起こす場合がある。たとえば次の(45a)では「歩く」事象が終了してから30分後という解釈をもつ可能性もある²⁹⁾。

- (45) a. 歩いて30分後、急に疲れが彼の全身を襲った。
b. 歩きはじめて30分後、急に疲れが彼の全身を襲った。

また習慣的解釈について、特定時点と関連する「はじめる」形の場合には、維持動詞であってもほとんど違和感なく用いることができる³⁰⁾。これは経路（あるいは動作の「展開」）のような制約がないと同時に、現在（あるいは以後の特定時点）までの継続という含意を表すのに適した用法であるためである。

さらに非「はじめる」形との関連をみてみることにしたい。以下は動作動詞(46)と維持動詞(47)の例である。

- (46) a. われわれが牛肉を食べて（から）30年が経った。
b. われわれが牛肉を食べはじめて（から）30年が経った。
c. われわれが牛肉を食べるようになって（から）30年が経った。
(47) a. われわれが洋服を着てから、30年が経っている。
b. かくてわれわれは、洋服を着はじめてから三代乃至四代を閲してゐるのである。
(三島由紀夫『三島由紀夫全集』B)
c. われわれが洋服を着るようになってから、30年が経っている。

非「はじめる」形で特定時点との関連を表す場合、(46a)(47a)をみると習慣的解釈よりはむしろすでに完了した特定の出来事との時間的関係を示す解釈のほうが優勢であり、習慣的解釈をもたせようとすればそれぞれのbやcのように「はじめる」形あるいは「ようになる」形を用いる必要がある。

また開始時点が明確でない動詞や一部の姿勢動詞についても、「習慣の開始時」については比較的明確である場合が多く、「はじめる」形の使用を容易にしているようである。

- (48) a. ??6時から見張りに立ちはじめた。
b. その事件があった翌日から、3人の衛兵が交代で見張りに立ちはじめた。
c. その日から彼は彼女の帰宅を毎日欠かさずに待ちはじめた。

これらの例のほかに、「はじめたころ」という形式を用いて事象の「はじめ - なか - おわり」を対比させた中での「はじめ」の時点を特定することができる。これは本論文 2.2 でとりあげた高橋 (2003) が「概観を前提とした精密化」として「全体のなかでの他の局面との関係を問題とするとき」に「特定の局面をとりだす」ことができると述べた用法である。岩崎 (1988: 41) で挙げられている例がこの用法にあたる。

(49) ちょうどあの人が雑誌ニーヴァに、「復活」を連載しはじめたころではなかっただろうか…

(草野唯雄「トルストイ爺さん」)

5 まとめと今後の課題

以上、本論文での主張をまとめる。

まず本論文では、局面補助動詞「はじめる」が用いられる場合を 3 つに分け、それぞれの用法の特徴を示した。そしてこれらの 3 つの用法に分類することにより、これまで森山 (1988) など「はじめる」形をもたないとされてきた維持動詞などの「はじめる」形の使用を指摘し、その理由（「はじめる」形をもてない、あるいは非常に難しい理由）を分析するとともに、それらの動詞の「はじめる」形が用いられる場合について、経路や非「はじめる」形との関係をもとに分析を行った。

そして「はじめる」の 3 つの用法について、それぞれの意味を詳細に記述するとともに、それぞれの用法において用いられる動詞（句）および副詞句などの共起表現について、具体例を中心に述べた。また先行研究において「はじめる」形に付随する現象として挙げられていた「（事象の）展開」「漸進性」「複数／くり返し解釈」「習慣的意味」についても、「はじめる」の 3 つの用法を区別して分析可能であることを示し、それぞれの含意が生じる理由と過程について述べた。

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

まず、本論文はおもに局面動詞「はじめる」の用法を中心に述べたため、動詞（句）や事象からみた体系的・包括的な記述がなされていないことである。この点に関しては、稿を改めて述べることにしたいと考えている。また局面動詞という面からは、局面動詞「つづける」との関係が述べられていないということがある。森山 (1988) など多くの先行研究でも述べられているように、「はじめる」形をもつことのできる動詞（句）はほぼ「つづける」形をもつことができる。また本論文 3.1 において、小田 (1986) で「運動のはじまりの局面とは、その運動のない状態とその運動の持続の局面との中間に位置する局面であって、その局面の次には、必ず持続の局面が来ることを前提として成り立つ。（中略）「～しはじめる」という局面動詞をつくることのできる動詞は、すくなくとも、＜はじまり＞と＜持続＞の局面をもつ」（小田 1986: 14-15）と述べられていることにもふれた。ここからは「つづける」＝＜持続＞に対して「はじめる」＝＜はじまり＞＋＜持続＞という含意関係も想定することができる。

さらに本動詞「はじめる」「はじまる」との関連についても、本論文ではまったくふれることができなかった。またそれぞれの意味・用法についての、たとえば事象投射構造分析などによる形式化についても今後の課題としたい。

注

- 1) 本論文で用いた例は、国立国語研究所の現代日本語書き言葉コーパス (BCCWJ)、先行研究で用いられている例、筆者が収集した例、および作例からなっている。BCCWJについては、国立国語研究所とLago言語研究所が開発したNINJAL-LWP for BCCWJを利用した。先行研究で用いられている例についてはそれぞれについて該当論文を、またBCCWJからの例については文献名の後にBと記した。また出典が示されていないものは筆者の作例である。
- 2) 反対に、たとえば森山(1988: 146)は「過程」局面をもつという理由で「悲しみ始める」が言え」としているが、BCCWJには「悲しみ始める」の例は1例もない。
- 3) ここでの局面解釈Cは局面そのものとは直接には関係がなく、一時点的事象の連続である「生徒たちが次々に到着する」と同じであると考えられるため、考察の対象から除く。
- 4) BCCWJ(コーパス総語数約1億語)には「待ちはじめる」「黙りはじめる」の例はないが、筑波大学が構築した『筑波ウェブコーパス(TWC)』(総語数約11億語)には「待ちはじめる」14例、「黙りはじめる」5例がみられる。これは総語数とともにウェブコーパスであるという性質も関連していると思われるが、ここではその指摘のみにとどめておく。このTWCの検索にも国立国語研究所とLago言語研究所が共同開発したコーパス検索システムNINJAL-LWP(NINJAL-LagoWordProfiler)を利用した。
- 5) Igarashi and Gunji(1998)ではそれぞれの時点について可視性(visibility)を定め、その程度によってそれぞれbasic, definite, visibleと定義した。ここで用いられているvisibleというのはもっとも程度の低い可視性で、「暗記する」のようなrのvisibilityが0であるものを除けば、①=②でない限り「はじめる」形をもつことができるということになる。
- 6) 岩崎(1988)ではそのまえに[A]として「出来事が1回」の場合をとりあげ、(A・1)運動時間が短いもの、(A・2)運動時間が長期のもの、として分析を行っているが、「一つの文の中において出来事が1回のもの」(岩崎1988: 86)と述べられているとおり、形を重視するあまり本論文で述べる別種の用法が混在してしまっている。
- 7) ただし実際は以下のような例も存在する。「^{たゞす}糺はグイグイ^{のみ}飲はじめながら、「(中略)」と云ふやうな意味の語を^{ことば}繰返し^{くりかへ}繰返し^{なら}駢べてゐた。」(徳田秋声「犠牲」、坪内祐三[編集]2002『明治の文学第9巻 徳田秋声』筑摩書房所収。ただし本論文の形式にしたがい、くり返し符号は一部改めた。)
- 8) さらに岩崎(1988)は「(B・3) 中断後の再開」として以下の例を挙げ、「二つの出来事の関係がこのような文構造になると「しはじめる」と「しつづける」が同じ局面をあらわし、それぞれ言いかえても主節の出来事の再開をあらわしていて意味がかわらない」(岩崎1988: 97)と述べているが、基本的には(B・2)「二つの出来事が順次」と変わらないと考えることができる。
 - i) 言葉がつきると、尚子はまた泣きはじめ、そして同じ恨み言をくりかえした。

(三浦朱門「偕老同穴」)
 - ii) この時だけ金光坊は本来の自分の眠に立ち返り、それから再び憑かれたように経を誦し始めるのであった。(井上靖「補陀落渡海記」)
- 9) ただし小田(1986)は<持続>について、状態変化自動詞などがもつ「結果持続」ではなく動作動詞の「過程」や維持動詞の「維持」局面のことを考えているようである。

- 10) 習慣的解釈が優勢となるこれ以外の理由については、この後の関連箇所においてそれぞれ述べる。
- 11) ただしこの場合、Jackendoff (1991) にもあるとおり、厳密に開始時点のみを指定するのではなく、開始後の時間を表すことも可能であると考えは必要はあるだろう。また、「6時に歩きはじめた」などのように、開始時点との共起が可能であることを考えると、Igarashi and Gunji (1998) の定式化のほうがより正確であるといえることができる。
- 12) さらに正確に言えば、単に経路のみが存在するだけではなく、「経路に沿った変化」を必要とする。
- 13) 次節に示すタクシスの意味などを十分に表す場合は、経路をもたなくてもかまわない。
- 14) ここで挙げた例の他に、局面動詞の「はじめる」と「出す」の比較を扱った研究においても「はじめる」の漸次性について述べられている、たとえば呉 (2000) では「副詞的修飾成分との共起関係について見ると、「～始める」形は漸次的な変化を表す、言わば「漸進性」の修飾成分と「突発性」の修飾成分と共起し得るのに対し、「～出す」形は「突発性」の修飾成分と共起しやすいという傾向がかなり顕著に認められる」(呉 2000: 8) として、「はじめる」と漸次的変化との関係を示唆している。
- 15) ただし必ずしも次の出来事との関係を示さなくてもよい。この場合、当該の出来事が「しばらく続いた」という意味をもつことにより、無標の形式との意味の差別化が行われる。
 - iii) 「はいありがとうございます、あみ子さん」母はそう言い、娘の手から取り上げたカメラを冷蔵庫の上に置いた。そして炊飯器のふたを開け、花模様の小さな茶碗にごはんをよそい始めた。運ばれてきたのは大好物の五目ごはんだ。料理上手の母は家族の好物をよく知っている。ひと口食べたらずばいしょうゆ味に夢中になって、「あみ子絶対おかわりするからね」と大きな声で宣言した。(今村夏子「こちらあみ子」)
- 16) 分類的には上述のタクシス関係を示す「はじめる」と、発生を示す「はじめる」とを包括する類をたてるべきであるが、本論文では便宜的に両者をタクシスに関連する用法として一括してまとめる。
- 17) この意味をもつ「はじめる」と文型を関連づけた研究に小田 (1986) がある。小田 (1986) は「～しはじめる」が表す「はじまり」の意味について「連続的な個別的な運動のはじまり」と「不連続的なくりかえしの運動のはじまり」に分けたあと、「不連続的なくりかえし」とは、個々の動作が、長期間にわたって何回か適当なインターバルをもちながら断続的にくりかえされることをいう。全体として一括したものは、特定の一つの連続した時間と関係しているわけではない。習慣的なものが多いが、＜習慣＞といった言葉では必ずしもくれないものがある。局面動詞「～しはじめる」は、そういった比較的長期にわたる持続過程全体のはじまりをあらわしている」(小田 1986: 20) と述べ、その生起環境を挙げている。ここではそのうち関連するものを挙げる(小田 1986: 20-22)。

(I) 構文的にパターン化されたもの

～しはじめてから (期間) になる。／～しはじめたのは (時期) だ。

(時期) から ～しはじめる。／(時期) になると ～しはじめる。

山に登りはじめて、今年で三十三年になります。(小説サロン)

三月になると、早くも遣唐使たちの帰国のことが噂に上り始めた。(天平の甍)

(Ⅱ)「このごろ、最近」などの修飾語をともなっている場合

最近は、非磁性の金属の中空球を作り、…中略…海底下の磁気測定の方法が行なわれ始めた。

- 18) これは語用論的な含意であるので、現在（あるいは特定の時点）には既に終了していることがはっきりしている場合、この含意は取り消し可能である。注 15 も参照。
- 19) 正確には「始点をもつ経路」をもたなければならない。
- 20) 対象の状態スケールをもつというだけでは経路をもつことにはならないことに注意する必要がある。たとえば「眠る」という事態に関連する修飾として「浅い眠り」「深く眠る」など眠りの質をある程度表現できるが、通常の「眠る」事象においては時間とともに眠りの質が深くなっていくとは限らず、また眠りの継続中にも眠りは浅くなったり深くなったりするため、一方向の経路をもつとはいいいにくく、したがって「眠りはじめた」という表現で経路的意味を表すことは（たとえば催眠術のように眠りの質について経路を想定できる状況でなければ）通常は難しいと思われる。
- 21) 事象を時間的に限界づけることによって時間的な「経路」をもたせるだけでは「はじめる」は用いられにくい。
- iv) (5 分間立っていれば／メガネをかけていれば／拳を握っていれば合格というテストで)
?? 彼は立ちはじめた／?? メガネをかけはじめた／?? 拳を握りはじめた。
- 22) 結果局面を維持できる動詞であっても、状態変化局面において経路的意味と関連する「はじめる」形を用いることはもちろん可能である。
- 23) 森山（1988）では「～しはじめる」といえない維持動詞に分類されている。
- 24) しかも多くの場合は「タ」形となることもこの解釈を優勢とするものである。
- 25) 井上・生越・木村（2002）において、日本語は「出来事全体を一つのまとまりとして叙述する形式」である非状態形を用いるためには「時間の流れにそった状況変化が把握され」なければならない、そうでなければ「ある設定時間において観察された場面属性としての状態を叙述する」状態形を用いるしかないとされている。ただし対照言語として用いられている朝鮮語は日本語とは性質の異なる〈状態 - 非状態〉の対立をもっているとされているため、ここでのタクシスの「はじめる」形のふるまいにおいてもなんらかの差が出るかどうか、慎重な検討が必要である。
- 26) 先行研究では「瞬間動詞」類と「維持動詞」類は同じように「はじめる」形をもたない（くり返しなどの意味を除く）とされていたが、その理由は同じでないことがここからもわかる。すなわち、前者は原理的に「はじめる」形をもたないために解釈強制などの派生が必要であるのに対し、後者はプラグマティックな理由によるものであるため、文脈的支持があればそのままの意味で「はじめる」形を用いることができる（あるいは文脈的支持の程度によりそれぞれの文の解釈可能性が変化する）のである。
- 27) これらの例において維持動作主の「意図性」のようなものが強く出てくる理由として、次のようなことが考えられる。すなわち変化後の状態が単に持続するだけでは、結果状態局面をひとつの「事象」として認めることができず、したがって単なる「状態」としてとらえることになり、そうすると当該事態の「はじめ」や「おわり」を認めることができない。それに対して結果状態を積極的に「維持」する場合、その局面を維持事象として認めることができるため、当該事態を

「はじめ」や「おわり」をもつ出来事として解釈することができる。次の例を参照。

v) a. そう言うと、彼はほんとうにぶら下がりはじめた。

b. *途中の枝に引っかかり、雑巾はそのままぶら下がりはじめた。

28) この場合、「握る」のほか「扶む」「ふれる」など状態維持にかなりの意図と力が必要な動詞のほうがこのような傾向をもつようである。

29) ただし、動詞の表す事象が長期間にわたる、いわゆる大規模動詞の場合はそのような解釈は難しいようである。

vi) ここに住んで2年がたった。（「住み終わって」から2年という解釈は難しい。）

30) もちろん3.2（および4.1）で示したように、漸次的変化を表すために経路的「はじめる」用法で用いられる／解釈される場合もあるが、ここでは特定時点の「はじめる」について述べる。

文献

Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji, 1998, “The Temporal System in Japanese,” Takao Gunji and Kôiti Hasida. (eds.) *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 81-97.

井上 優・生越 直樹・木村 英樹, 2002, 「テンス・アスペクトの比較対照 日本語・朝鮮語・中国語」 生越直樹 編『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会, 125-159.

岩本 遠億 編著, 2008, 『事象アスペクト論』開拓社.

岩崎 修, 1988, 「局面動詞の性格 ―局面動詞の役割分担―」『武蔵大学人文学会雑誌』20 (1), 81-104.

Jackendoff, Ray, 1991, “Parts and boundaries,” *Cognition*, 41, 9-45.

宮城 信, 2004, 「連続動作の局面と意味」『筑波日本語研究』9, 36-54.

森山 卓郎, 1988, 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.

日本語記述文法研究会 編, 2007, 『現代日本語文法3』くろしお出版.

呉 鐘烈, 2000, 「局面動詞について」, 筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』31, 1-13.

小田 由美, 1986, 「局面動詞「～はじめる」について」『横浜国大言語研究』4, 13-23.

高橋 太郎, 2003, 『動詞九章』ひつじ書房.

An Analysis of the Japanese Phasal Subsidiary Verb *V-hazime-*

KONISHI Masato

Abstract : In this paper I analyze the distribution and the meaning of the Japanese phasal subsidiary verb *V-hazime-*, which represents the beginning phases of events. In section 2, I review some previous works of *V-hazime-* and insist on the need of an analysis relating the verbs (or verb phrases) and the environments where *V-hazime*'s- are used. And in section 3, I show the three types of the distributions of *V-hazime-* relating 1) paths (or some incremental scales), 2) tactic relations (or representing the sequence) of events, and 3) introduction of time-viewpoints, describing their meanings and the conditions respectively. Then in the next section I focus on the verbs and modifiers they occur with and give an explanation for some problems, such as their impossibility to co-occur with verbs of maintenance, their meaning with graduality and habituality, which have not been fully, or never previously explained.